

Title	Jude the Obscure考
Author(s)	植苗, 勝弘
Citation	Osaka Literary Review. 11 P.100-P.109
Issue Date	1972-10-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25735
DOI	10.18910/25735
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

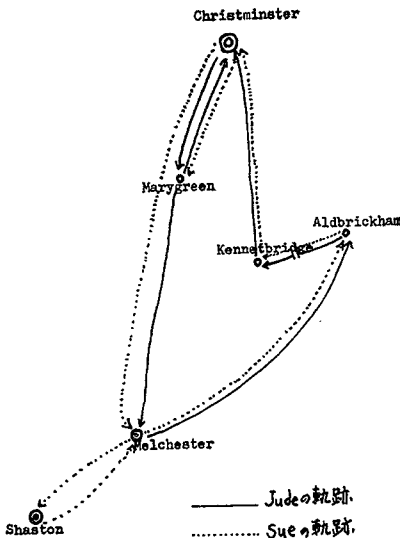
Jude the Obscure 考

植 苗 勝 弘

1896年に書かれた *Jude the Obscure* (以下 *Jude* と略す) は Hardy のいわゆる Wessex Novels の最後の作品である。したがってこの小説をそれまでの Wessex Novels の延長線上の作品として読むことも不可能ではない。しかしこの小説には、Hardy の従来の小説には見られなかった現代的性格が含まれているように思われる。その現代的性格とは何か。それをこの小説の構成とテーマとから探してみたいと思う。

1. 構 成

まず2人の主人公 Jude と Sue の行動の軌跡を図示すれば次の如くで



あり、二人の軌跡はほぼ同時的同一性を保って居り、Marygreen, Christminster で物語りが始まり、またこれらの場所で物語りが終わっている。結局この小説は Jude と Sue との葛藤が中心をなしているのであり、端役として Arabella, Phillotson を配しているものの plot そのものは極めて単純である。この構成の単純さは例えば1878年に

書かれた Hardy 第六番目の小説であり、最も Hardyらしい性格を持つ傑作、*The Return of the Native* (以下 *The Native* と略す) とこの作品とを較べてみるといっそう明きらかである。登場人物の全てが互いにかみ合い、main plot と subplot とが最後まで緊迫感を持ち続ける、即ち *The Native* でよく指摘される unity of action はこの *Jude* には見られない。むしろ場所(舞台)が変わる毎に、その場その場での Jude と Sue との葛藤が入念に描かれ、あたかも紙芝居の絵が一枚一枚はがされて行くような感じがする。換言すれば、起承転結という物語性よりも、Jude と Sue との 'situation' の描写に作者は余念が無いように思われるのである。

またこの小説の特徴のひとつは、plot の turning point になるものは、長男の弟殺害及び自殺という事件を除いて、全て Jude と Sue との、また彼等自身の内面的な事情、及び彼等の主体的行動に依っていることである。即ち Hardy の他の作品に頻繁に見られる、主人公達に全く関わりが無い外的原因は、この小説においては極めて少ない。さらに二人の主人公の行動のきわだって入念な描写に較べると、端役としての登場人物は余り精彩がない。したがってこの小説では、storyteller たる Hardy の面目は影をひそめ、I. Howe の言葉を借りれば事件の sequence よりも、situation の描写に注意を払い、また主人公の内面を念入りに掘り下げるといった現代の小説作法を駆使した、心理作家としての Hardy が前面に出て来ていると言える。

因みに、かつて E. M. Foster は *Aspects of the Novel* の中で、登場人物が plot の要求に黙従するよう命ぜられているのが、Hardy の小説に一貫する欠点であると述べたが、*Jude* に関する限り、この批評は当たらないと思う。それは前述したように、この小説の plot は極めて単純であり、plot だけを取り出してみても、この小説の何物をも語り得ないからである。即ち Hardy の他の小説に見られる登場人物の固定化——Foster の指摘する欠点は、換言すれば、この登場人物の固定化ということであろうが——が少なくとも Jude と Sue とには見られない。再び *The Native* を例に引くならば、ヒロイン Eustacia Vye を克明に描写し

た、あの有名な 'Queen of Night' の如き個所はこの小説にはない。主人公が時の推移と共に多面性を示し、変化発展して行くのがこの小説のいまひとつの特徴である。

固定化、典型化された登場人物と遍在意志 (Immanent Will) との、かわり合いの悲劇的アスペクトを描くのが、Hardy 小説の一大特徴であった。しかしこの小説では、2人の主人公の性格は固定化、典型化されて居らず、又それに対応するかの如く、Immanent Will の主張は前面に出て来ない。勿論そういう主張が皆無であるというのではない。'Providence' 'Fate' 'Nature' (全て大文字) という言葉は何度も出て来るし、こういう言葉からいわゆる Hardy 哲学の匂いを嗅ぎとることは出来るが、ただこれらの言葉を過大評価すると、この小説の持つ現代的性格を見失うことになると思う。

他の作品との比較がこの小論の目的ではないが、*Jude* と *Tess of the d'Urbervilles* との関連について少し言及して置いた方がよいかも知れない。*Tess* は1889年に書かれた (出版は1891年) が、それに先だつ2年前 Hardy は既に *Jude* の構想をねっていた⁽¹⁾。又1889年には Ibsen 劇がイギリスの劇場に現われたし、翌1890年には Parcell 事件が起こっている。このような社会情勢を背景にして書かれた *Tess* と *Jude* であるから、伝統批判、社会批判、とくに結婚制度に対する批判など、両作品はその内容に共通したものを持っている。又 *Tess* が転々と生活の場を変えるのも、*Jude* と Sue の行動に似通っている。しかし *Tess* はそういった当時の社会批判が盛り込まれているにも拘わらず、依然として偶然が悲劇を決定的にするという、Hardy の宿命論哲学の表明であり、*Jude* とは趣きを異にすると言わねばならない。

2. テーマ

それではこの小説のテーマは何なのか。この問題を考察する為に、ここで *Jude* と Sue の二人の character について少し述べて置く必要がある。

Jude がその生涯に亘って抱いているものは、‘生に対する不安’である。自分はこの世で生きるに値しないのではないか、という疑問、大人になるのが恐ろしい、という不安。これを彼は子供の時から抱いている。⁽²⁾さらに成長して青年になると、自分の抱く‘生の不安’はこの世の制度の中にあるのではないかと疑い始める。⁽³⁾これが彼の行動の原点である。そこでその‘不安’から逃れる為に彼は絶えず何か頼りなくては生きて行けない。最初彼は学問に身を託そうとし、大学から閉め出される。閉め出されはするが、彼の大学に対する憧れ——身を託すものは全て Jude にとっては憧れであり、‘不安’からの逃避場所になるのだが——は容易に消えない。⁽⁴⁾向学心を挫かれ、Sue にも去られた Jude は、今度は聖職につくことに生甲斐を見出そうとする。しかし Sue に対する恋情がますます慕う中で、Jude は自分の体内にある、どうしても抑えようのない欲情に気づき、果して自分は聖職につく資格があるのかと、疑い始める。⁽⁵⁾そして人妻となった Sue と接吻を交した時、Jude は自分の理想と行為との矛盾に気づき、神学書を焼いてしまう。学を志して女の為に妨げられ、また聖職につこうという意思も女の為に挫かれた。この時の Jude は興味深い告白をする。⁽⁶⁾ Jude をして学問も聖職も放棄させ、一市井の罪深い人間として生きるように決心せしめたものは何か。それは Sue に対する愛情であり、これが終生変わらぬ彼の生活の拠り所——裏を返して言えば‘不安’からの逃避場所——となる。それに加えて、いつの間にか、‘何物にもとられぬ自由’を信奉する Sue の共鳴者となっているのである。しかし Sue との同棲生活によっても、彼の精神は十全の安静を得ている訳ではなく、自分のこれまでの失敗に対する挫折感が絶えず‘生の不安’をかきたてている。再び Christminster に戻って来た時、彼は昔なじみも混じる大勢の中で突然演説を始める。この演説こそ Jude のそれまでの生活の総括なのであり、Jude を弁護する Hardy の声だと思われる。

‘However it was my poverty and not my will that consented to be beaten. It takes two or three generations to do what I tried to do in one ; and my impulses—affection—vices perhaps they should be called—were too strong not

to hamper a man without advantages ; who should be as cold-blooded as a fish and as selfish as a pig to have a really good chance of being one of his country's worthies. You may ridicule me—I am quite willing that you should—I am a fit subject, no doubt. But I think if you knew what I have gone through these last few years you would rather pity me—'...I was, perhaps, after all, a paltry victim to the spirit of mental and social restlessness, that makes so many unhappy in these days!' '...I am in a chaos of principles—groping in the dark—acting by instinct and not after example. Eight or nine years ago when I came here first, I had a neat stock of fixed opinions, but they dropped away one by one; and the further I get the less sure I am. I doubt if I have anything more for my present rule of life than following inclination which do me and nobody else any harm, and actually give pleasure to those I love best.....'⁽⁷⁾

子供の悲惨な死に遇った後も彼の Sue から授けられた '進歩的思想' は変わらない。ところがこの事件の後の Sue はそれまでの考え方をすっかり棄ててしまつて、無理矢理に自分を因襲的な枠組の中へはめこもうとする。

'Sue, Sue—affliction has brought you to this unreasonable state! After converting me to your views on so many things, to find you suddenly turn to the right—about like this—for no reason whatever, confounding all you have formerly said through sentiment merely! You root out of me what little affection and reverence I had left in me for the Church as an old acquaintance—What I can't understand in you is your extraordinary blindness now to your old logic....How you argued that marriage was only a clumsy contract—which it is—how you showed all the objections to it—all the absurdities! If two and two made four when we were happy together, surely they make four now? I can't understand it, I repeat!'⁽⁸⁾

しかし Sue は Phillotson の元へ去って行き、Jude の病いをおしての説得も無駄に終る。こうして学問にも、聖職にも、愛する女性にも拒まれた Jude には、今や頼るものとして何もなく、'生への不安' が今までにない深刻さをもって迫って来るのである。旧約聖書の中で、ヨブが神の試練に耐えかねて己れの生を呪う言葉を反すうしながら Jude は死んでゆくので

ある。

Sue には Jude のような‘生への不安’はない。しかし精神の不安定さは Jude に勝るとも劣らない。持前の神経過敏に加えて、旧秩序への嫌悪と合理主義に対する不安とが彼女の精神の中で絶えず渦巻いている。一見‘sexless’, ‘epicene’ にみえる Sue であるが、彼女の精神の中のこの因襲と合理主義の渦巻きの中に、男性に対する女性独得の感情が入り込むと、彼女の行動は全く不合理なものとなる。「重力と発芽の作用以外にはどんな法則にも束縛されない」「お祈りなんかしていると偽善を感じる」「Christminster はその中世主義から脱皮しなければならない」等と Jude の前で豪語する彼女であるが、ひとたび放校処分を受けて、世間を騒がせたとなると、慌てて Phillotson と結婚して世間態を繕う。⁽¹¹⁾しかしその結婚が失敗だと解ると、もう彼女は耐えられない。持前の合理主義精神が頭をもたげて来、夫に頼んで離婚してもらい、Jude と共同生活を始める。「結婚制度の不合理性を身を以って体験したから私はあなたとも結婚したくない。お互いに自由でいきましょう。」と言う Sue の意見にはそれなりの理屈がある。しかし寝室を共にしたいと迫る Jude に対し、それを拒否する彼女の理由ははっきりしない。そういうことに対して自分は憶病なのだとか説明できないのである。結婚問題をも含めて、男女の愛情を中心問題としながらこの小説には、人間生活における sex の位置づけに対する言及はどこにも見られない。ヴィクトリア朝という背景を考えると恐らくこれがこの問題に対する作者の限界ではなかったかと思われる。さて、かつて Jude 妻であつた Arabella が現われたのを契機に Jude が Sue に迫った時彼女は次のように言う。

‘Very well then—if I must I must. Since you will have it so, I agree! I will be. Only I didn’t mean to! And I didn’t want to marry again, either!...But, yes—I agree, I agree! I do love you. I ought to have known that you would conquer in the long run, living like this!’⁽¹²⁾

しかし後になってこの時の自分を説明する彼女の言葉は甚だ要領を得ない。

‘I never deliberately meant to do as I did. I slipped into my false position through jealousy and agitation!...’ ‘...Mine (My wickedness) was not the reciprocal wish till envy stimulated me to oust Arabella. I had thought I ought in charity to let you approach me—that it was damnably selfish to torture you as I did my other friend. But I shouldn’t have given way if you hadn’t broken me down by making me fear you would go back to her (Arabella)...’ ‘...And then—I don’t know how it was—I couldn’t bear to let you go—possibly to Arabella again—and so I got to love you, Jude...’⁽¹³⁾

子供の死は彼女に決定的な打撃を与える。子供が死んだのを自分のせいにし、今まで自分が求めていた自由とは、利己主義のそれに他ならず、本能を貧っていたのは間違っていた、今こそ運命が私を罰したのだ、自分は神の前に全面降伏をすると、自分の‘転向’を Jude に告白する。⁽¹⁴⁾かくて形式を軽蔑し、自己を信じていた Sue は、今度は自己を棄て、形式の中に救いを求めて Phillotson のもとに帰って行く。しかしそこに救いがあるという保証はない。Sue の描写は彼女が Phillotson の寝室へ始めて入って行く scene で終わっているが、精神をずたずたに引き裂かれた哀れな Sue が適確に描かれて居り感動的である。⁽¹⁵⁾

登場人物を固定させ —Foster 流に言うならば、登場人物を plot に服従させ —natural force, chance, love 等に姿を変えて現われる運命と、登場人物との悲劇的衝突を描く時、Hardy の視点は神のそれであった。それは又神の正義が続べる世界を描いた Aeschylus の視点に喩えることも出来よう。しかし Jude を書いている時、もはや Hardy の視点は、従来の高さや安定さを失い、人間の高さまで降りて来て、更に人間心理の内部に入り込んでいる。そこに Hardy が見たものは、神にしろ運命にしろ、そういったものに翻弄される人間ではなく、自分自身の中に矛盾を含み、絶えず流動して、理性を以ってしてもとらえることの出来ない、否むしろ己れの理性すらも裏切りかねない、そういった生身の人間であったのだ。この小説のテーマについては従来色んな説が提起されているが、以上の分析から私は、今述べたような人間を描くことが正にこの小説において Hardy が意図したことではなかったかと考える。とすれば、これま

での小説で彼が用いた客観的リアリズムの手法を、*Jude* においては、かなり差し控えざるを得なかったことも肯けるのである。

3. 結 論

Jude と *Sue* とが互いに知り合ってから、決定的な訣別をするまでの間、ひとときたりとも、互いの精神の安んずる時があっただろうか。先にこの小説は *Jude* と *Sue* との葛藤が中心であると述べたし、また Hardy 自身この小説の preface において、この小説が二人の男女の fret と fever を扱っていると述べている。⁽¹⁶⁾しかしその fret と fever とは、通俗小説に見られる既存の社会秩序の枠内での男女間の fret や fever にとどまらない。*Jude* と *Sue* の抱く fret と fever は、自分達を取り巻く環境に対するものであり、更に彼等自身に向けられたものなのだ。二人は物心両面において、どこにも安住の地を見出すことは出来ない。Christminster を出て再び Christminster へ戻って来るまでの二人の彷徨は、単なる彷徨ではなく、外面的に見れば、石をもて追われる罪人の彷徨であり、内面的に見れば求道の彷徨なのだ。自己の理性と感情とに忠実に生きんとして、周囲の批難を浴び、また内部崩壊を重ね、なおかつ、理性と感情にしがみついて生きる二人、そこには出口もなければ救いもない。*Jude* を死なせ、*Sue* を半狂乱の状態に押しやってしかこの小説を終らせ得なかった Hardy 自身もこの 'absurdity' を克服しているとは思えない。しかしその事を責めるよりも、われわれは 19世紀の終りに現代の病根を既に感じとり、'absurdity' そのものをテーマにして小説を書いた Hardy の現代性を評価すべきではなからうか。因みにこの小説の最初のタイトルは *The Simpletons* (馬鹿者達) であり、次に *The Hearts Insurgent* (反抗する心) と改められ、最終的には *Jude the Obscure* となった経緯を考える時、Hardy が *Obscure* という言葉で言い表わしたことの中には、いわゆる 'absurdity (不条理)' に通ずるものがあるのではないかと推測してもあながち見当外れではあるまいと思われる。

註

- (1) 'April 28. A short story of a young man—"who could not go to Oxford"—His struggles and ultimate failure. Suicide. There is something the world ought to be shown, and I am the one to show it to them....' (F.E.Hardy: *The Life of Thomas Hardy*, New York: St Martin's Press Inc., 1962)
- (2) Jude went out, and, feeling more than ever his existence to be an undemanded one....Growing up brought responsibilities, he found. Events did not rhyme quite as he had thought. Nature's logic was too horrid for him to care for....As you got older, and felt yourself to be at the centre of your time, and not at a point in its circumference, as you had felt when you were little, you were seized with a sort of shuddering, he perceived....If he could only prevent himself growing up! He did not want to be a man. (Thomas Hardy: *Jude the Obscure*, The Greenwood Edition, London Macmillan & Co. Ltd., 1964. pp.15.)
- (3) There seemed to him, vaguely and dimly, something wrong in a social ritual which made necessary a cancelling of well-formed schemes involving years of thought and labour, of foregoing a man's one opportunity of showing himself superior to the lower animals, and of contributing his units of work to the general progress of his generation, because of a momentary surprise by a new and transitory instinct which had nothing in it of the nature of vice, and could be only at the most called weakness. (*Ibid.*, pp.70—71.)
- (4) (Sue) "It (Christminster) is a place full of fetichists and ghost-seers!" (Jude) "Well, that's just what I am, too," he said. 'I am fearful of life, spectre-seeing always.' (*Ibid.*, pp.181.)
- (5) He now returned with feverish desperation to his study for the priesthood—in the recognition that the single-mindedness of his aims, and his fidelity to the cause, had been more than questionable of late. His passion for Sue troubled his soul....Yet he perceived with despondency that, taken all round, he was a man of too many passions to make a good clergyman; the utmost he could hope for was that in a life of constant internal warfare between flesh and spirit the former might not always be victorious. (*Ibid.*, pp.231—232.)
- (6) 'Is it,' he said, 'that the women are to blame; or is it the artificial system of things, under which the normal sex-impulses are turned into devilish domestic gins and springes to noose and hold back those who want to progress?' (*Ibid.*, pp.291)
- (7) *Ibid.*, pp.393—394.
- (8) *Ibid.*, pp.423—424.

- (9) Sue's logic was extraordinarily compounded, and seemed to maintain that before a thing was done it might be right to do, but that being done it became wrong; or, in other words, that things which were right in theory were wrong in practice. (*Ibid.*, pp. 262—263.)
- (10) '...I have sometimes thought, since your marrying Phillotson because of a stupid scandal, that under the affectation of independent views you are as enslaved to the social code as any women I know!'
'Not mentally. But I haven't the courage of my views, as I said before....'
(*Ibid.*, pp. 290.)
- (11) '...this frightened me, and it seemed then that the one thing I could do would be to let the engagement stand. Of course I, of all people, ought not to have cared what was said, for it was just what I fancied I never did care for. But I was a coward—as so many women are—and my theoretic unconventionality broken down.
...(*Ibid.*, pp. 267.)
- (12) *Ibid.*, pp. 321.
- (13) *Ibid.*, pp. 425, 426.
- (14) 'We must conform!' she said mournfully. 'All the ancient wrath of the Power above us has been vented upon us, His poor creatures, and we must submit. There is no choice. We must. It is no use fighting against God!' '...But whoever or whatever our foe may be, I am cowed into submission. I have no more fighting strength left; no more enterprise. I am beaten, beaten!...' 'I want a humble heart; and a chastened mind; and I have never had them yet!' '...I wish my every fearless word and thought could be rooted out of my history. Self-renunciation—that's everything! I cannot humiliate myself too much....' (*Ibid.*, pp. 413, 414, 416, 417.)
- (15) Placing the candlestick on the chest of drawers he led her through the doorway, and lifting her bodily, kissed her. A quick look of aversion passed over her face, but clenching her teeth she uttered no cry. (*Ibid.*, pp. 480)
- (16) For a novel addressed by a man to men and women of full age; which attempts to deal unaffectedly with the fret and fever, derision and disaster, that may press in the wake of the strongest passion known to humanity; to tell, without a mincing of words, of a deadly war waged between flesh and spirit; and to point the tragedy of unfulfilled aims, I am not aware that there is anything in the handling to which exception can be taken. (*Ibid.*, pp. vi.)